

Lear の道化 (その2)

西 野 義 彰

1

道化が登場するのは第一幕四場である。その時点までに Lear は愚かにも忠臣 Kent を追放し、最愛の娘を勘当しており、百人の騎士を従えて Goneril の館に身を寄せている。Cordelia がフランスに去って以来、道化はかなり憔悴しているようで、Lear もそのことはよく承知している。登場するや否や道化は、変装してまでも愚かな老王に仕えようとする Kent ¹⁾に「とさか帽」(coxcomb) を差し出して被るようにすすめる。理由を聞かれると道化は次のように答える。

Why? for taking one's part that's out of favour. Nay, and thou canst not smile as the wind sits, thou'lt catch cold shortly: there, take my coxcomb. Why, this fellow has banish'd two on's daughters, and did the third a blessing against his will: if thou follow him thou must needs wear my coxcomb. (I. iv. 97-102) ²⁾

つまり、Kent は落ち目の王に仕え人生を棒に振ろうとしているからである。世の中を渡る時に肝要なのは、風向きを見極め臨機応変に対処することであり、それができない者は道化帽が良く似合う阿呆にすぎない。Lear は真実が見えない哀れな阿呆だが、そんな阿呆に仕えるなら Kent も立派な阿呆になる。道化が Kent に語った処生訓を確信しているかどうかは疑わしい。だが、「何をしても許される」(all-licensed, I. iv. 220) 天下御免の特権を得るためにあえて社会のアウトサイダー的でペット同然の屈辱的な

1) この初老の従者が Kent であることに、道化のみならず舞台上のすべての人物が気付いていない。

2) Kenneth Muir(ed.), *The Arden Shakespeare: King Lear* (Methuen, 1972). 本論でも作品からの引用はすべてこのテキストによる。

立場を選んだ、それ故、普通の人間の様々な欲望やこだわりから開放された道化が、世間の有様を正確に見据え常識をふまえた上で皮肉を述べたことは面白い。「二人の娘を追放し、第三の娘には祝福を与えた」という道化の言葉は劇の事実と矛盾するが、これは道化による固定観念や価値基準の意図的な逆転もしくは裏返しという特質によるものであり、彼の意図はあくまで Lear の愚行を皮肉り批判することである。イギリスの文学ではいつも「生まれつきの阿呆」(natural fool) と「偽の阿呆」(artificial fool) の間で区別がなされていたようである³⁾。Lear の道化は頭の一部に微妙な欠陥があるという印象を与えるものの、劇中での機知や皮肉に富んだ彼の台詞、当意即妙の応対やノンセンスの背後にセンスを潜めた断片的なざれ歌、即興詩などから判断すれば、彼は明らかに阿呆を装った賢明な職業道化である。真正の阿呆である生まれつきの道化はともかく、職業道化が王侯貴族の家屋敷で身を立てるには、その持ち味を十分発揮するしか道はない。周囲の者は彼に才気煥発、見事な機知問答や予期しない笑いを期待するし、道化もそれが自己の本分であると理解している。知的な道化の厳しい点は、平凡な言い方が許されず、知恵者として常に斬新奇抜な表現で語らねばならないことである。(それができなくなれば恐らく主人に見捨てられることになる。)それ故、彼が格言、ユニークな比喩やレトリックなどを多用するのは当然であり、Lear の道化も例外ではない。ただ、ついでにもう一つ言っておかねばならないことは、道化がいかにか知恵者であろうとも、身分的に極めて低く社会の底辺に位置する存在だけに、彼の言葉がたとえ深い真理や洞察を含んでいても、しばしば道化の戯言として真面目に受け取ってもらえなかったことである。道化が “he (Lear) will not believe a Fool.” (I. iv. 132) と Kent に言う時、彼は多分このことを意味している。

「道化服」(motley, I. iv. 143) を着ている道化は己れが阿呆であることを自認しているが、阿呆でありながらその事実気付かず賢者ぶる者たちが世間には多すぎると嘆く。Kent が Lear に「この道化は全くの阿呆ではないようですな」と語ると、道化はすぐに

No, faith, lords and great men will not let me; if I had a mono-

3) Enid Welsford, *The Fool: His Social and Literary History* (Peter Smith, 1966), p. 160.

poly out, they would have part on't: and ladies too, they will not let me have all the fool to myself; they'll be snatching.

(I. iv. 149-52)

と言って、辛辣な風刺の矢を貴族たちに向け彼らを平然と馬鹿にする。この道化が「無知の知」に到達した賢者であると自負しているわけではないが、狭い価値観で目前の利害にのみとらわれ、人生におけるより重要なものに無関心な彼らもまた道化に劣らず阿呆であり、このような阿呆が世間に氾濫すれば道化として身を立てるのが難しくなると皮肉っている。この道化は世間一般よりもむしろ外観と実体を見誤り重大な過失を犯した Lear の愚かさや精神的盲目を執拗に指摘し揶揄し続ける。‘crown(s)’ (I. iv. 153, 56, 57, 59) という言葉による駄洒落にしても、「クラウン銀貨」、「王冠」、「玉子の殻」、それに「頭」という意味を巧妙に絡ませふざけからかっているのだが、道化の主眼は王権や財産をすべて不孝な娘に譲ってしまった愚かな Lear に真の姿を示すことにある。このような道化は Lear にとってまさしく ‘bitter Fool’ (133) であろう。

Lear が娘の顔色をうかがうと道化はすかさず次のように言う。

Thou wast a pretty fellow when thou hadst no need to care for her frowning; now thou art an O without a figure. I am better than thou art now; I am a Fool, thou art nothing.

(I. iv. 188-91)

以前は王の威厳に満ちていたが、無一文となった現在の Lear は「ゼロ」にすぎず道化以下に成り下がった。なぜならば道化は ‘Fool’ であるが、Lear は ‘nothing’ であるからである。‘fool’ のみならずこの ‘nothing’ という言葉もこの劇ではキー・ワードの一つと考えられる。Lear が Cordelia に憤慨したのも彼女のやや冷たい ‘nothing’ という言葉であったし、王位や財産のみならず正気と理性をも失って嵐の荒野に飛び込んで行く時、彼は外的・内的にも ‘nothing’ になる。Gloucester が Edmund の陰謀により地位も光も失い暗闇に突き落とされる時 ‘nothing’ であり、Edgar も ‘Tom o’Bedlam’(I. ii. 133) として逃亡する時まさに ‘nothing’ である。一方、当時 “Nothing will come of nothing.” という意味のラテンの諺がよく知られ

ていた。また、‘nothing’ はキリスト教的意味、つまり、神が無から宇宙創造の大事業を完成したという意味も含むだろうし、宇宙の秩序が崩壊すれば創造以前の恐るべきカオスが再来するという人々の危機感とも結びついたであろう。道化の意味するものは、恐らく、Lear は今や存在理由を失くし無価値なものにすぎないが、道化は社会構造の中でそれなりの確かな位置を占め決して無ではありえない、ということではないか。世の無常のシンボルとしてしばしば用いられる運命の車輪で言えば、頂点にしがみついていた王が車輪の回転で下に落ち、どん底にいた道化が王と位置交換して頂点ならずともその近くに達した格好になる。現在の Lear は実質さえ失った ‘Lear’s shadow’ (I. iv) にすぎないのである。

Goneril の冷淡な態度に激怒し呪いの言葉を浴びせながら Regan のもとへ移動する Lear に、道化は ‘crab’ (野生のリンゴという意味で、不機嫌な人を表わす象徴でもある) の比喩を用いて姉と変わらぬ彼女の冷酷な性格を伝えようとする。現実に対して盲目の Lear に道化はさらに別の比喩によって彼の愚かさを衝く。カツムリにはなぜ家があるかと切り出し、道化は意地悪気にこう答える。

Why, to put's head in; not to give it away to his daughters,
and leave his horns without a case. (I. v. 29-30)

娘への怒りと復讐心で内的均衡を失い、道化に対する注意力も散漫になっている Lear に、彼は次々と追い討ちをかける。その中で彼は実に意味深い言葉を Lear に語っている。「あんたはすばらしい道化になれるよ。」(Thou would'st make a good Fool, do. 36) 尤も、この時点での Lear はその言葉の真の意味を理解できるはずもないし、道化もそのことは十分承知している。そのさりげない表現が何らかの効果をもつとすれば、それは Lear よりもむしろ観客に対してであろう。Lear は知らず知らず自らが王から道化への道を歩むことになる。

2

Lear 一行が Gloucester の居城にやってくると足かせをはめられた Kent が声をかける。道化はすぐさま洒落をとぼして哀れな姿の Kent をから

かう。

Ha, ha! he wears cruel garters. Horses are tied by the heads,
dogs and bears by th'neck, monkeys by th'loins, and men by
th'legs: when a man's overlusty at legs then he wears wooden
nether-stocks. (II. iv. 7-10)

形容詞 'cruel'に「痛々しい」と「毛糸の」(crewel) という二つの意味を
かけ、Kent が元気すぎて木製のストッキングをはいているとお道化する。
ここでも Lear と道化の反応は非常に対照的である。王の意識を持ち続け
る Lear にとって Kent は使命を託された家来であり、彼へのこのような
仕打ちは Lear に対する反逆を意味し容認し難い。一方、あらゆる物事
に対して相対的距離を維持し冷静かつ客観的に捉える賢明な道化にとって、
Lear の怒りや動揺はある意味で無縁のものであり、哀れな Kent の姿もか
らかいの恰好の対象になる。状況がさほど深刻かつ悲劇的でなければ、道化
は職業的直感によってそこから笑い、皮肉やペーススにつながる要素を巧み
に引き出し遊びや不真面目な表現へと作り変える。Lear と Kent が真剣
に問答している同じ舞台空間に立ちながら、彼らの利害から離れてあたかも
永遠の命を与えられ全く別な世界(空間)に生きる者であるかの如く、道化は
父と子をテーマにした面白い歌をうたう。

Fathers that wear rags
Do make their children blind,
But fathers that bear bags
Shall see their children kind.
Fortune, that arrant whore,
Ne'er turns the key to th'poor. (II. iv. 46-51)

貧しい親は子供を親不孝にするが、裕福な親は子供の手厚い世話を期待でき
る。また、気まぐれな運命の女神は貧者には特に冷たいというのが主旨であ
る。Lear たちへの当てこすりも狙った道化のこのような音調は、彼らを
包む現実的な空間を揺さぶるような軽みの空間を作り出す。確かに道化はこ
の壮大な悲劇の一人物であり、主人公の悲惨な運命と行動をともしている。

その意味では、彼は主人公が苦悩し死に至る厳粛で荘厳な世界に片足を置いている。だが、彼は王を中心とする秩序立った社会に入り込み、その中心に近づくことはあっても、そこに長く滞ることは決してない。なぜなら道化は本質的に社会のアウトサイダーであり、その周縁もしくは外側に生きる存在であるからで、彼の他方の足はそこにしっかり置かれている。道化はある意味で否定的な要素、つまり、無秩序、無責任、虚、不真面目や不誠実などを具現しているといえる。道化の逆転した視点で主人公たちの世界を眺めると、彼にはそれが滑稽でばかばかしいものに見えてくる。結局、道化の存在によって双方の価値基準、世界が相互に照射しあって *tragi-comic* な姿が浮かび上がることになる。道化がしばしば作り出す特有の軽みと、王や聖なるものさえ冒瀆し高い所から引きずり落す痛快で大胆な言動が、観客に対してコミック・リリーフの効果を与えられることができる。また一方で、Lear の道化は社会的な常識をも代表している⁴⁾ということを付け加えておくべきであろう。

Lear が一瞬舞台を去ると、道化は足かせをはめられた Kent に次のような助言をする。

... Let go thy hold when a great wheel runs down a hill, lest it break thy neck with following; but the great one that goes upward, let him draw thee after. When a wise man gives thee better counsel, give me mine again: I would have none but knaves follow it, since a Fool gives it. (II. iv. 69-74)

落ち目の主君からは身を引き、上昇気運の王には手を引いてもらえという考えには世間の常識にかなうものがある。だが、これは阿呆の助言であり「悪党」(knaves) だけに従ってもらいたいと彼が言う時、助言の中味が曖昧になってくる。道化はこの後以下のような歌をうたって締めくくる。

That sir which serves and seeks for gain,
And follows but for form,
Will pack when it begins to rain,

4) Cf. *A Shakespeare Handbook* (Nanundo, 1969), p. 407.

And leave thee in the storm.
 But I will tarry; the Fool will stay,
 And let the wise man fly:
 The knave turns Fool that runs away;
 The Fool no knave, perdy. (75-82)

前半はよいとして、後半の最後の二行が内容をやや複雑にしているのだが、道化が本当に意味しているのは何であろうか。道化は‘fool’と‘knave’を微妙に使分け、さらに‘wise man’をそこに対置する。Empsonによると、複雑な構造をもった‘fool’という語には主に四つの意味、つまり、1) 間抜けな、単純なもしくは常識に欠ける人、2) クラウン、職業的な道化師やあざける人、3) 頑固で敵意のある悪党（聖書的）、4) 低能の、白痴のような人、という意味が当時あったようである。また、Erasmusによって要約される中世的な見解、つまり、不敬な無神論者と対照的な善良な人という考え方が存在していたし、‘fool’は人間性の内情を知らせるという見方もエリザベス朝に持ち越され、その結果シェイクスピアにおける主要な意味は、全くの侮蔑的な目だけでなく一種の迷信的な畏敬の念で見つめられる半ば狂った道化 (half-mad clown) ということになる⁵⁾。一方、Welsfordによると、Erasmusの時代には‘fool’と‘knave’はつねに抱き合わせになっていて、同意語として扱われたり両者の相違が強調されたりした。宗教的道德家にとって‘knave’は永遠の相の下で見られた‘fool’にすぎなかった。他方で、‘fool’は、宮廷道化の伝統にもとづき、真の洞察力を一種の狂気で隠した真実の語り手を意味した。‘fool’をどのように扱おうとも、それは慣習の転倒のための道具にすることができた⁶⁾。要するに、Learの道化は中世からルネサンスにかけて‘fool’や‘knave’の観念に結びついていた様々な意味を念頭に置いて語った可能性がある。道化の歌の大まかな内容はこうであろう——目先の利益を求めて仕える者は主君が落ちぶれるとすぐに離れていく。賢い者は逃げ出すがよい。阿呆の私は残るつもりだ。去りゆく悪党は阿呆になるが、阿呆は決して悪党ではないのだ。——道化の言う賢い者とは恐らく現世的尺度において妥当な判断力を持ち、損得が分かる者という意味で、

5) William Empson, “Fool in *Lear*” (*The Sewanee Review*, LVII, 1949), pp. 177-78.

6) Enid Welsford, *The Fool*, *op. cit.*, p. 239.

必ずしも良い意味で用いていない。すぐに逃げ出す悪党についても、現世において彼は抜け目のない行動により利益を得るであろうが、来世における神の裁きと救いという永遠の相の下でその行動を見た場合、それは愚行にすぎず彼もまた阿呆ということになる。それに反して、勘定高くない阿呆はそれだけ心が純粹であり、永遠の相の下では神による救いの近い所に位置しており、神を否定する悪党（Empson のいう聖書的な意味の ‘fool’）とは本質的に異なる。これが道化の真意のように思われる。道化の助言にも一理あって賢い悪党ならそれに耳を貸し従うこともある。だが、Kent はすばらしい阿呆であるから Lear を見捨てるような愚行はやめて、阿呆の私と同じように是非その阿呆ぶりを死ぬまで貫いてもらいたい⁷⁾と本音らしきものを匂わす。凋落気味の主君に見切りをつけ、出世の道を他に探ることが世俗的な常識であるとすれば、道化は必ずしもそれを支持していない。彼は超然とした態度で、この世において阿呆と悪党の一体どちらが賢明なのか、賢者ぶっている者が本当に賢者なのか、また、善良で愚かな人間が本当に愚かなのかという難しい問いを投げかける。換言すれば、道化は両手に賢と愚を隠し持ち、どっちがどっちだというハンディ・ダンディの意地悪なゲームを我々に対してしかけているのである。我々が言い当てたつもりでも巧妙にかわされ、結局、道化に馬鹿にされることになるのかもしれない。「これを一体どこで習ったのだ、阿呆」と Kent が尋ねると、道化はすかさず「足かせの中ではないね、阿呆」とあざやかな返答をする。そもそも Lear の道化が wise fool という逆説的存在であってみれば、そのような逆説的もしくはさかさま論理思考は彼にとってお家芸の一つにすぎないのである。

3

かってないほど雷鳴が耳をつんざき、風雨が容赦なく叩きつけるすさまじい嵐の中で、娘たちへの Lear の怒りと憎悪は無限に拡大し、大自然と宇宙そのものにまで向けられる。恐怖と寒さに襲われた道化は家の中で娘たちの機嫌取りをした方がましだと提案する。

O Nuncle, court holy-water in a dry house is better than this

7) Cf. The Arden Shakespeare: *King Lear*, *op. cit.*, p. 82, footnote.

rain-water out o'door. Good Nuncle, in, ask thy daughters blessing; here's a night pities neither wise men nor Fools.

(III. ii. 10-13)

はたして彼は本気でこのことを Lear に勧めているのであろうか。Danby の解釈はこうである。道化はここで限界に達し、権力におもねる日和見主義者に特有の追従さえいとわぬ。彼は卑劣にも偽善的な悪党になることにさえ妥協するであろう⁸⁾。私見によれば、彼は決して悪党ではないし、悪党になる気持ちさえない。はたして彼が善と悪、賢明さと愚かさなどについて明確に認識し、確たる信念を持って Lear と行動を共にしているかどうかは断言し難い。一連の 'fool', 'foolish', 'folly' の言葉の多用によって、すべての人物が「この阿呆どもの大舞台」では何らかの阿呆であるということが暗示されている。すべてが阿呆であるなら、どんな種類の阿呆がこの道化の好みなのか。(この問いにはすでに答えたつもりである。) 久しく Lear の道化として仕えてきて、主人の性格や現在の心的状態について彼は十分理解している。道化は一方で神的狂気により深遠な事柄を語るという古くからの信仰と結びついてきたが、他方で社会的に特殊な地位にいる道化の言葉は聞く価値のない阿呆の戯言とみなされたのも事実である。上のように言ったものの、道化は Lear が耳を傾けるとは全く思っていないし、それに従うことを望んでもいない。彼はここで決して本心を語っているわけではない。あの冷酷非情な娘たちに己れの暴言を詫び、ご機嫌取りをする——これほど Lear にとって屈辱的なことがあるだろうか。道化の提案は Lear への思いやりのように見えるが、実際には Lear の内的苦悩に対する一種の茶かし、からかいの趣を内包している。また、このことは Lear に向けた彼の台詞の大部分に共通しているように思われる。野島氏が言うように、もし仮に Lear が道化の助言に従う素振りを少しでも見せたならば、「たちどころに道化は全く逆のことを言ったことでしょう。それこそハンディ・ダンディというものですよ⁹⁾。」ハンディ・ダンディというゲームは道化にとって他者を手玉に取ったり、煙に巻いたりできるきわめて有用な手段であり遊びである。

Lear たちが嵐を避けて退場し、舞台でただ一人になると道化は謎めい

8) John F. Danby, *Shakespeare's Doctrine of Nature* (Faber and Faber, London, 1948), p. 109.

9) 野島秀勝『ロマンス・悲劇・道化の死』(南雲堂, 1971), p. 389.

た予言をする。

When priests are more in word than matter;
 When brewers mar their malt with water;
 When nobles are their tailors' tutors;
 No heretics burn'd, but wenches' suitors;
 When every case in law is right;
 No squire in debt, nor no poor knight;
 When slanders do not live in tongues;
 Nor cut-purses come not to throngs;
 When usurers tell their gold i'th'field;
 And bawds and whores do churches build;
 Then shall the realm of Albion
 Come to great confusion:
 Then comes the time, who lives to see't,
 That going shall be us'd with feet.
 This prophecy Merlin shall make; for I live before
 his time. (III. ii. 81-95)

このうち最初の4行は現状、次の6行がユートピア的社会を描き、91-2行は84行目の後に入れるべき詩行だという説明は多分妥当であろう¹⁰⁾。ただ、このような予言をした道化の真意、アーサー王に仕えたとされる予言者 Merlin への言及の意義は何なのか。現状とユートピア社会についての描写の後には、イギリスの崩壊とまともな社会の到来に関する内容が続く。恐らく道化は阿呆に満ちたこの世にユートピアなど存在しえないことを認識しており、結局、予言そのものに彼が深い意味を託したようには思えない。せいぜいユートピア的社会を対置することにより、現実に対する皮肉と風刺がそれだけ強化されるぐらいである。注目に値するのは最後の一行であろう。道化はアーサー王伝説中の Merlin より以前に自分が生きていて、いずれ彼がこの予言をするであろうと言う。ここで面白いのは、道化がアーサー王より前の異教世界へと観客の意識を引き戻し、いやむしろ、劇の時代背景がはる

10) The Arden Shakespeare: *King Lear*; *op. cit.*, pp. 104-5, footnote.

か昔であることを強調しつつ、エリザベス(or ジェイムズ)朝の観客に舞台から直接語りかけていることである。遠い過去に生きているはずの人物が一瞬劇世界とそこに流れる劇時間から抜け出して、エリザベス朝という時代に降り立ちその同時代人¹¹⁾であるかの如く振舞う。そして現在に見えながら実際には過去である劇時間、後に Merlin が生きるはずの未来と、さらに未来でありながら芝居を見ている現在という時間が観客の意識の中で複雑に絡み合う。作者が幼少の頃にはなじみ深い劇形式であった道徳劇において、誘惑者ヴァイスがしばしば劇時間から抜け出し観客に直接話しかけたようである。Lear の道化はヴァイスの特徴の一つを持ってはいるが、別な見方をすると、彼は悲劇の中に存在しながら道化になることで時間と空間の制約から解放されているとも言える。社会や人間の一部でもある道化性もしくは道化的精神は一時代、一共同体というような一つの時間や空間に限定されるものではなく、逞しい生命力をもって普遍的に生き続けてきたことは Welsford や Willeford らの研究で明らかである。自在に劇世界を飛び出し、あのような予言をすることで、彼は我々の時間意識を一瞬ではあるが攪乱し、どう理解してよいのか困惑している我々をしり目に悠然と立ち去って行く。結果的に彼は道化特有の無時間性、無空間性を我々に印象づけることになった。

近くの小屋に避難する頃には Lear は忍耐の限界を越え完全に狂気の世界に落ちていくが、道化は狂気への下降を徹底させるかの如く 'mad' という言葉を繰り返す。(madman, III. vi. 9; mad yeoman, 13; mad, 18) Lear が狂いながらも二人の娘に対する裁きの妄想にとらわれている時、道化は狂気を装った Edgar の歌に続けてやや卑猥な歌をうたったり、Lear に調子を合わせて滑稽な冗談をとぼしたりする。だが、三人の阿呆もしくは狂人が行う擬似裁判はきわめて異様であり、さすがの道化も重苦しい暗うつな雰囲気や和げるにはほとんど無力に見える。また、ここでの彼の台詞はそれを暗示するかのように短く量的にも少ない。Lear が「朝に夕食を取ることしましょう」と取り留めのないことを言うと、道化もそれに合わせるように奇妙な言い方をする。

And I'll go to bed at noon. (III. vi. 83)

11) Edgar が追手を逃れるために狂人の姿 (Bedlam beggar) に身をやつし自らを 'poor Tom' と呼ぶ時、彼もまた Lear の劇が成り立つはるか遠い過去からエリザベス朝という現在にまい戻り、観客の同時代人として立っていることになる。

結局、これが彼の最後の台詞となり、Dover に向けて出発して後、彼の消息は不明のままである。

なぜ道化は第三幕の途中でこのような形で退場したのか。作家による道化の処理の仕方には何か理由がありそうである。エリザベス朝の劇作家たちがシェイクスピアほど道化に関心を示さなかったのは、登場人物としての劇的可能性を十分見抜けなかつただけでなく、道化を重要な人物として劇に持ち込んだ場合彼をいかに処理するか、劇の全体的統一をいかに図るかという煩わしい問題を避けたかたからだと考えられる。道化が劇のプロットに重要な係わり方をすれば、それだけ処理の仕方も重要になってくる。この劇の場合、作家はこの時点で道化の必要がなくなった、つまり、劇人物としての彼の役割がほぼ終了したと判断した。彼はこの悲劇においていくつか重要な機能を果たしている¹²⁾ように思われる。たとえば、彼は社会や人間の虚飾の下に潜む真実を見抜き、それを遠慮なくリアルに語る。また、彼は価値(規準)の転倒を行い、逆転した視点で見た世界を Lear たちの世界に対置させ、あらゆる価値観や観念を相対化する。本質的には喜劇的存在である彼はノンセンス、だ洒落、いろいろなざれ歌やお道化などによって緊張した場面のこわばりを解き、軽みの空間を創造することでコミック・リリーフの役割も果たしている。他方、道徳劇のヴァイスと同様、彼は主人公をいろんな手段を用いて墮落(Lear の場合は狂気)へと引き込む。ただ、Lear が完全に狂気に落ち込んだ後で道化が退場するのを見ると、彼の最も大きな役割は、仮借のない辛辣な言葉で Lear の愚かさを執拗に指摘し、彼を完全に狂人(または道化)にすることであるように思われる。なぜならば、道化の痛烈で批判的な言葉の大部分は Lear に対して向けられており、彼は Lear に娯楽や慰みを与え内的苦悩を軽減するどころか、Lear が忘れたいと願っている不快な事実を機会あるたびに毒舌、揶揄などで思い出させようとしているからである。以前に道化は Lear に「あんたはすばらしい道化になれるよ」と予言的で意味深い言葉を語った。Lear はその予言通り着実に道化への道を歩み続け、ついに完全な道化になった。道化は王と奇妙な対をなすが、道化はしよせん社会のみならず Lear の内的世界に対してもアウトサイダーである。Lear を高い地位から引き下げ、あの重大なきっかけを

12) この劇における道化の機能については後で再び扱う予定なので、ここではごく簡単に触れておきたい。

作った ‘nothing’のレベルまで転落させてしまえば、Lear の苦悩に対して無力な道化は役目を終えて退場する他ない。道徳劇が後期になるに従って悪役ヴァイスの人間化が進み、この魅力のある人物をいかに退場させるかという技術的な問題が道徳劇作者の一番の関心事になっていったようである¹³⁾。ヴァイスの主たる役目が主人公の墮落への誘惑であってみれば、その仕事が終了すれば存在理由はなくなる。後は何らかの形で退場するか、さほど目立たない形で居残るかのいずれかである。Lear の道化は多くのヴァイスと同様途中で退場させられた。その後の彼の消息が不明なのは作家の不注意とか失策であると言われているが、そのようなことは主人公たちに一体何が生じ、彼らがいかなる形で悲劇的な結末を迎えるかに比べれば些末な問題である。つまるところ、道化の消息については不明のままにしておく方が面白いのかもしれない¹⁴⁾。なぜならば、本来寓意存在であり時間を超越したヴァイスが懲罰や処刑を受けずに退場するのがごく自然であるように、不死身性を有した道化も死ぬことなく、どこか別の場所でしたたかに生きていると考える方が道化のイメージに相応しいからである。

ちなみに、この劇の結末部で Lear が絶命直前に口にする ‘my poor fool’ (V. iii. 304) について触れておきたい。この ‘poor fool’が一体誰を指すかについていろいろな説が出されている。それは Lear 自身が腕に抱いている、今は亡き哀れな姿の Cordelia のことであるとか、Lear が久しく可愛がり、しばらく忘れていたあの賢い道化を意味しているとか、絶望と衰弱でもうろうとした彼の意識に、Cordelia と道化が区別しがたい状態で浮かんだとする説がある。また、Cordelia と道化の一人二役説は、一人の役者が Cordelia と道化の双方を交互に演じていたので、この ‘fool’ には当然その二人が含まれていると主張する。Albany が「陛下は自分が何を言っておられるのか分からないのだ」と言っているように、ここでの Lear は正常な思考力をほとんど失っていると見た方が妥当であろう。唯一の希望の光、人生の支えであった Cordelia を亡くし、絶望と虚脱感に襲われながら娘の死を確信しつつもその事実を拒否し、生命回復のわずかな可能性を信じ、死の間際に Lear がその言葉を語ったことを考えると、文脈の点からも、‘poor fool’ は一義的に彼の腕の中で冷たくなっている Cordelia を指

13) 野島秀勝, *op. cit.*, p. 379.

14) *Ibid.*, p. 382.

していると思われる。(これが定説のようである。) 他方, William Willeford はユニークな解釈を打ち出している¹⁵⁾。尤も, 彼自身は Harold C. Goddard¹⁶⁾ の見解からヒントを得てさらに敷衍しているわけであるが, 結論を先に言えば, ‘poor fool’ は Cordelia と道化の双方を指しているということになる。Edmund, Goneril, Regan の三人が不倫の関係で合体するが, それと平行して Cordelia, Lear それに道化が劇の最後で合体すると考え, これらを結婚という概念で捉える。三人組の合体は姦通的な近親相姦的な性格をもち, それぞれのグループの人物たちが互いを選び契りあったという意味でそれらは結婚なのだとする。彼はさらに老王, 彼の娘と道化の三人一組に, やがてその娘と結婚する英雄を加えて, 完全性を象徴する四人一組の, 王国再建に係わる典型的なパターンを読み取ろうとしているようである。しかし, この解釈は興味深くはあるが, やや穿ちすぎの感がある。この劇に神話などにしばしば潜む原型的なパターンが存在しうることを否定するわけではないが, 老王による長い統治により活力を失い崩壊の危機に直面した王国を再建すべく, 逞しい英雄が現われ難題を次々に解決して王の娘と結婚し, 新たな活力をもって王国を再建するという意味でのパターンはここにはない。英雄らしきフランス王は序幕に登場するものの, その後何ら重要な働きをしておらず, Lear や Cordelia にしても終幕で悲劇的な最後を迎える。また, 結末での社会秩序の回復についても, 我々にはそれがきわめて弱々しく感じられるにすぎない。作家の関心は, 上述のようなパターンあるいはそのヴァリエーションにあるのではなく, ダブル・プロットによる重層的な世界における主人公たちの悲劇的な運命, 宇宙の神秘的な営みの特に悲劇的な側面に向けられている。少なくとも最後の瞬間の Lear は「Cordelia との謎めいた関係の裡に王国の未来を保っている一人の道化」としてよりもむしろこの壮大な悲劇の主人公として, 誰もかつて経験したことのないほど数々の苦難に耐えた希な王として, たとえ道化の幻影が一瞬彼の脳裏に入り込むことがあっても, 最愛の娘に思いをはせながら絶命すると見る方が自然ではなからうか。

15) William Willeford, *The Fool and His Scepter* (Northwestern University Press, 1969), pp. 221–22.

16) *The Meaning of Shakespeare* (University of Chicago Press, 1951), p. 548.

4

最後に、Lear の道化がこの劇で果たしている機能について考察しておきたい。シェイクスピアの喜劇に登場する重要な道化 Touchstone や Feste の場合、彼らの名前自体にそれぞれ「試金石」、「祝祭」という寓意的な意味が込められていて、¹⁷彼らは自己に割り当てられた劇機能に従って行動する。すなわち、自らが試金石となって彼の周りの様々な人物たちの個性や品格、さらには劇世界そのものを試したり、クリスマス最後の夜の盛大な祭りを主宰し積極的にそれに参加している。Lear の道化には彼らのような寓意的劇機能を暗示する名前はなく、彼らが劇の終りまで留まっているのに対し彼は途中で早々に退場してしまう。それにも拘らずこの道化はいくつかの重要な役割を果たしているように思われる。

一般に、とさか帽を被りまだらの道化服をまとった宮廷道化は、あえてアウトサイダー的で社会的にきわめて低い地位を選ぶことにより王や側近など多様な人間の自尊心に仕えたり、突飛で滑稽な言葉や行動によって彼らに楽しみを与える¹⁷⁾という本来的な機能をもっている。Lear の道化もまたその機能を果たしている。一方、彼は *King Lear* という悲劇に登場する舞台道化でもあり、彼と観客との係わりに比重を置くならば、彼は特殊な姿の喜劇的人物として滑稽な所作で観客、なかでも土間客の間から笑いを誘発したりすることで一種のコミック・リリーフとしても機能している。Kenneth Muir は、道化はコミック・リリーフよりもむしろ観客の情緒のための安全弁を提供すると考えている¹⁸⁾。要はどちらに力点を置くかの問題で、卑猥な台詞やざれ歌などの他に即興的で面白い仕草を時折交えたりお道化たりして、彼が劇の緊張した雰囲気や観客の内的こわばりを解きほぐすことはあったであろう。上で「一種の」という言い方をしたのは、*Macbeth* の門番の場面に見られるような典型的なコミック・リリーフとは異なり、道化の台詞とその周囲にアイロニー、ペーソス、重苦しさなどの要素が多分に漂っているからである。Lear の道化の別な機能として、真実の語り手、社会や人間の批評家としての役割を挙げることができる。年齢や素性については不詳であるが、彼には職業道化が¹⁹⁾つとまるほど十分な才能と教養があり、人生経験も豊

17) Cf. Robert Hillis Goldsmith, *Wise Fools in Shakespeare* (Liverpool University Press, 1974), p. 48.

18) The Arden Shakespeare: *King Lear*, *op. cit.*, p. lvii.

富のようである。彼が社会的な常識を代表していると言われる根拠はここから来ている。物質的な欲望や野心を捨て去り、身分の低い道化に甘んじることで得た天下御免の特権を利用して、彼は客観的で冷徹な目を通して見た人間社会の有様、様々な人間の愚行について語る。特に、激しやすく単純で愚かな Lear に対しては真の現実、実体を皮肉を込めて伝え、不条理に満ちた厳しく冷酷な現実の側面について正しい認識を求める。この世の大舞台で様々な阿呆どもが賢者ぶって歩きまわる光景は、健全な常識と判断力をもった道化服の知恵者にとって腹立たしいよりもむしろ風刺やパロディの恰好の対象に見えるに違いない。ただ、社会に対する道化の批判的な言葉を重視するあまり、Glena D. Wood¹⁹⁾の如く、この道化は社会に関する作家の見解を代弁していて、社会に対する作家の抗議の主要な手段であると結論するのは問題であろう。

道化には一般的に相対化機能というものがあるが、Lear の道化も決して例外ではない。社会の虚と実、人間の外観と実体などをつぶさに見てきた道化は、善人たちの確信する価値観や悪人たちがよりどころにする合理主義的価値観の各々の限界や弱点をさかさまの異なる視点で見抜き、双方が相対的なものにすぎないことを暗示する。一時代、一社会における身分の上下、貧富の差、世俗的な利害損得なども時代の変動により常にその有様を変えうる束の間の姿にすぎず、賢者と阿呆の概念にも相対的な意味しか含まれていない。坂を登り降りする車輪の比喩で Kent に処生術を語る時、彼は賢者、阿呆、悪党の三種類の間人を持ち出し、内容を意図的に曖昧化する。概念の相対性を玩ぶかのような道化の助言に従うことが賢明なのか愚行なのか。彼の真意はどこにあるのか。道化の不思議な作用によって我々の確信しているものが曖昧化し逆のものにさえ変容する。別な言い方をすると、道化はここで我々に対してハンディ・ダンディのやっかいなゲームをしにかけていて、我々がどう答えようと見事にかわされ阿呆にされる。賢と愚に関しても、本来の意味領域が彼によって曖昧化され、その結果、賢が愚に、愚が賢にさえ見えはじめる。かくして、さかさまの視点をもつ道化の登場により、この劇世界の善や悪などあらゆる観念や価値規準が相対化され、より複雑になってくると言える。

19) "The Tragi-Comic Dimensions of Lear's Fool" (*Essays in English and American Language and Literature*, 1972), p. 221.

道化のさらに別な機能は、すでに述べたように、道徳劇のヴァイスと同様、主人公 Lear を狂気（もしくは破滅）へと追いやることであろう。道化の痛烈な皮肉、毒舌、謎かけなどは何をしても許される道化の特権と主人に対する配慮から来るものであろうが、彼の台詞の大半は Lear の心を紛らすどころか彼をいらだたせ、忍耐や理性を失わせたあげく完全に狂気に追いやることを意図しているように見えるし、事実その点では大いに効果を上げている。換言すれば、彼の重要な機能は Lear を真正の阿呆つまり道化にすることである。従って、王から道化への転落こそ Lear の最大の悲劇であると言える。さらに挙げるとすれば、彼はこの劇に一貫して流れている悲劇的かつ喜劇的な音調に大きく貢献していることであろう。